

## 幼児期における知覚体制化の発達について

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
三野 範子

本研究では、幼児期における知覚体制化の発達について、4歳前半から6歳前半までの幼児73人を対象に、カニツァ図形課題（カニツァの四角形・三角形）、多義図形課題（アヒルウサギ図版・マンマウス図版・ルビンの盃図版）、ケルンの量形態模写課題の3課題を実施した。

カニツァ図形では、幼児の主観的輪郭の捉え方の変化を検討した。その結果、カニツァの四角形において4歳前半から5歳後半にかけて四角形に着目する子どもが増加していた。しかし、6歳前半では四角形に着目する子どもが減少し、黒丸に着目する子どもが増加していた。事例分析から4歳前半と6歳前半の子どもの反応を比較すると、6歳前半の子どもは手前にかかれた図形ではなく奥にかかれた図形を答えようとして、黒丸に着目した子どもが増加したのだと考えられた。また、カニツァの三角形においては5歳前半において三角形をとらえることができた子どもが減少していた。5歳前半では、「ホシ」と回答した子どもがほぼ半数みられ、「ホシ」と回答した子どもを三角形着目とみなした場合、カニツァの四角形と同様に年齢とともに徐々に増加するという傾向がみられた。このことから、5歳前半では三角形には着目しているが、何かに見立てて回答する傾向があるのではないかと考えた。

多義図形課題では、知覚を反転させるプロセスを検討した。その結果、全ての図版において6歳前半においても自発的に反転することは難しかった。本研究においては、反転ができ始める年齢は6歳後半以降であることが示唆された。また、マンマウス図版において、4歳前半から4歳後半にかけては、部分に着目して図をとらえていたが、5歳前半以降は、全体に着目して図をとらえていたことが示された。

ケルンの量形態模写課題では、4歳前半から6歳前半にかけて完全分節の割合が増加していた。5歳後半になると多くの子どもは完全分節ができていたことから、5歳後半以降の子どもは全体知覚ができるようになり完全分節にいたると考えられた。

以上から、幼児期の知覚体制化の発達は部分から全体への着目へと移行するが、幼児の主観的輪郭を捉える力や知覚の反転は、幼児期以降に獲得されることが示唆された。主体的輪郭を捉える力や、知覚の反転の発達プロセスがどのように変化していくかは、幼児期から学童期への発達の移行と関連させて今後検討していく必要がある。